

氏名	長田 舞
学位の種類	博士（人間文化科学）
学位記番号	甲第人18号
学位授与年月日	2018（平成30）年9月23日
学位授与の要件	東京女子大学学位規程第3条第3項第1号
学位論文題目	Representations of Madness in Victorian Literature : Narrative, Gender, and Society （ヴィクトリア朝文学における狂気の表象： 語り、ジェンダー、社会）
論文審査委員	主査 教授 原田 範行 副査 教授 原 英一 副査 教授 Kleitz, Dorsey 副査 中央大学名誉教授 深澤 俊

内容の要旨および審査の結果の要旨

I. 論文内容の要旨

本論文は、イギリス・ヴィクトリア朝文学における狂気の表象について、この時代の代表的作品8点を中心に、それぞれ、語り（narrative）、ジェンダー、および当時の社会状況との関係という3つの視点から詳細に考察し、それぞれの特徴を統合的に明らかにした英語論文である。序論と結論を除く本論は8章から構成され、各章はそれぞれ、Charlotte Brontë の *Jane Eyre* (1847)、Mary Elizabeth Braddon の *Lady Audley's Secret* (1862)、Thomas Hardy の *The Return of the Native* (1878) と *Jude the Obscure* (1895)、Robert Louis Stevenson の *The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde* (1886)、Oscar Wilde の *The Picture of Dorian Gray* (1891)、Bram Stoker の *Dracula* (1897)、H. G. Wells の *The War of the World* (1898)、および同じく Wells の *The Island of Doctor Moreau* (1896) についての考察に充てられている。狂気の表象に

は、正常に対する異常、社会的規範や常識によって抑圧された情動、常軌からの逸脱、人格の分裂、語りの権威の揺らぎや無力化などが含まれるが、そうした表象の性質に関する精緻な分析を通じて、いわゆる近代リアリズムの変容とモダニズム出現への道筋を明らかにしている。

II. 審査の結果の要旨

1. 論文の構成

上述の通り、本論文は、イギリス・ヴィクトリア朝文学における代表的な 8 作品における狂気の表象を、主に 3 つの視点から個別的に論じた 8 章を中心に構成されている。各章の配列は、概ね、作品の刊行順に沿っていて、第 1 章および第 2 章がヴィクトリア朝初期から中期、第 3 章から第 5 章がヴィクトリア朝中期から後期、第 6 章から第 8 章が、ヴィクトリア朝後期からいわゆる世紀末文学を包摂する形を取っている。各章の内部では、上述の 3 つの視点（語り、ジェンダー、社会）を中心に考察がなされているが、個々の作品の特徴によって、各視点の扱いや比重には若干の差異が見られる。もともとこれは、文学史的推移を視野に入れつつも、作品の個別的特徴と解釈に十分留意し、それを論述の基盤にする、という本論文の基本的方向性から見て妥当であると思われる。

2. 論文の特徴

本論文の中心をなす各章の内容と考察の特徴は、次の通りである。

第 1 章は、Charlotte Brontë の *Jane Eyre* について、主な先行研究の成果を参照しつつ、主人公ジェインの自伝的語りにおけるロチェスターの描写と、「屋根裏の狂女」とされるバーサの描写における諸特徴を明らかにする。そこには、ロチェスターの優位性や、自ら語る機会を奪われたバーサへの抑圧が看取されるのだが、論文筆者は、そうした従来からの指摘にとどまらず、作者ブロンテがヒロインであるジェインに与えた語りの権威に着目し、ロチェスターの権威が覆されること、バーサへの抑圧がジェインの語りによって逆に効果的に浮かび上がっていることを強調している。

第 2 章は、ヴィクトリア朝中期に広く読まれた、いわゆるセンセーション・ノヴェルの代表例である Mary Elizabeth Braddon の *Lady Audley's Secret* を考察し、まず、ヒロインのレイディ・オードリーの狂気や異常が上述のバーサのような狂気とは異なり、

実は狂気と正気の境界線が極めて曖昧にされていることに着目し、その上で、そうした「曖昧な」狂気が、重婚や殺人、煽動という社会的犯罪に結びついていることを明らかにして、社会における狂気と正気の二項対立的考え方そのものに揺らぎが生じていることを述べている。

第3章は、Thomas Hardyの*The Return of the Native* および*Jude the Obscure* におけるヒロインのユーステイシアやジュードの狂気と女性性の描写の特徴が、社会的に理想化された「純粋な女性」像と「墮ちた女性」、あるいは「新しい女性」という対比的観点から考察される。しかしながら、この対比的観点に対して作者ハーディは、作品中において必ずしも明快な区別を与えてはおらず、そのことは、男性作家ハーディが、社会的規範とその侵犯を往還する女性性を凝視し、むしろそこに作家自身の創造性を見出していたのではないかと論文筆者は指摘する。すなわち、女性性に着目することで、従来のリアリズムの超克を作者ハーディは意図していたと考えられるのである。

第4章は、Robert Louis Stevensonの*The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde* を対象に、二重人格の表象が語りの権威を解体していく状況を考察したものである。言うまでもなく、本作品の語り手である「私」ジキルは、「彼」と呼ばれるハイドとの二重性を有しているわけだが、それだけでなく、作品のプロットの展開自体が、新聞記事や目撃証言など、多数の語りによって構成されているところに特徴がある。そこには、「屋根裏の狂女」バーサを語ったブロンテ/ジェインのような語りの統一性は見られない。語り手ジキルが、反社会的ハイドに逸脱していく狂気の表象は、たんに二重人格の様態を表現することにとどまらず、語り手そのものの権威を解体していく過程を明らかにするものであるとの論文筆者の見解が示されている。

第5章は、Oscar Wildeの*The Picture of Dorian Gray* に関する考察である。ドリアン・グレイ自身の人生と画家バジルが描いたその肖像画との関係は、ジキルとハイドの関係にも似た二重性が感じられるが、ジキルとハイドの場合とは異なり、ドリアンの自我の分裂は、バジルやヘンリー卿を含む3者の同性愛的関係性によるものであることが、論文筆者によって指摘されている。すなわち、当時、社会的禁忌であった同性愛もまた、ヴィクトリア朝文学における狂気の表象の一角を占めるものとして考えられるということが示されている。

Bram Stokerの*Dracula* を論じた第6章は、第1章以降で論じてきた狂気の表象の語りについての各論を集約しつつ、ついに、狂気のコア部分が不在であるという「マス・

ヒステリア」に至った世紀末文学について考察したものである。周知の通り、ドラキュラは、自らの語りを持たず、周囲の登場人物の日記や手紙、会話、噂などによって生み出されたものである。このことは、既に考察したジキルとハイド、あるいはドリアンとバジル、ヘンリー卿の場合にも増して、狂気の表象が語り手そのものの存在を奪い去る力を有するものであったと論文筆者は論じている。

第7章および第8章は、H. G. Wells の *The War of the World* および *The Island of Doctor Moreau* について論じたものである。両作品はともに SF 小説として扱われることもあるが、論文筆者は、この SF 的描写の内に、狂気の表象が日常世界とその語りを脅かし、転覆する可能性があることを指摘し、この危機感こそ、20 世紀モダニズム文学への結節点になるものであるとする。刊行年からすれば、*The Island of Doctor Moreau* の方が *The War of the World* よりも 2 年早いですが、論文の構成を刊行順とは逆にしたのは、*The War of the World* が、帝国主義的世界支配を強める当時の大英帝国にあって、逆支配への人々の恐怖を見事に捉えつつも、最終的には火星人が撃退され日常に復する結末が用意されているのに対して、*The Island of Doctor Moreau* では、動物を解剖して人間のように改造するモロー博士が殺害され、人間そのもののアイデンティティが危機に瀕すること、そして語り手プレディックが、モロー博士の島からの脱出に成功して人間社会に戻った後もなお、人間の獣性に脅威を感じ続けるという結末に、ヴィクトリア朝文学における狂気の表象の、より深刻な問題提起が込められていると考えられることによる。異常や規範からの逸脱、日常からの排斥に端を発した狂気の表象は、ここに至って、逆に人間社会を広く支配し、深い人間不信の表象へと変貌していくことになるのである。

3. 論文の評価

上述のような構成と内容を持つ本論文は、少なくとも次の 3 つの点で、十分に評価できる。一つは、文学作品における狂気の表象を考える対象を、狭い意味での *madness* や *insanity* だけでなく、ジェンダー問題や二重人格、同性愛、帝国主義支配といった社会的諸現象に関する描写にまで広げ、精神的・身体的問題から社会的病理に至る広義の、そして多面的な狂気の表象を、1837 年から 1901 年に及ぶヴィクトリア朝文学全般にわたって詳細に論述することに成功していること、第二に、対象が広範囲に及ぶものの、ヴィクトリア朝を代表する作品の精密なテキスト分析を精力的に手掛けてこれを

論述の基礎としていることにより、論述に説得力があり、また語りの特徴やプロットの展開についての考察が十分になされているため、それが、狂気の表象の推移に見られる文学史の変容という課題に対する適切な検討にもなりえていること、そして第三に、全体としてミスの少ない流暢な英語表現にまとめられており、論文筆者の学術的英語表現能力を評価できること、である。

もちろん、そうした長所を有する本論文ではあるが、瑕疵がないわけではない。第一に、狂気の表象という設定で対象を広げているため、多面的な表象を扱ってはいるものの、狂気そのものの定義や性格が曖昧であり、そのことが章と章の連関の弱さにもなっていること、第二に、文学史の変容を視野に入れて多くの代表的なヴィクトリア朝文学作品を扱っているため、個々の作家の個別的事情や特質についての指摘に不備や曖昧さが残ること、第三に、本論文で扱った文学作品と密接に関係しているはずの同時代の医学言説や群小作家の作品群への調査・分析が必ずしも十分ではなく、また、ヴィクトリア朝を代表する作家についても、ディケンズやサッカレー、ジョージ・エリオットなどへの言及が弱いこと、などである。

審査委員会では、こうした本論文の巧拙について、書面および口頭で十分に審議した結果、改善すべき点は少なからずあるものの、本論文各章における分析の確かさと論述における視点の卓抜さ、また本論文が全体として示し得ている文学史的ヴィジョンの意義、さらには論文筆者の研究が今後さらに進展していく可能性などについてはこれを十分に評価すべきであり、本論文が博士学位請求論文として然るべき水準を越えているとの結論に至った。

4. 最終試験の概要

2018年4月23日付で論文筆者より提出された本論文に関して、審査委員による審査委員会が直ちに組織され、論文審査をおこなった。審査委員は、原田範行（主査、本学教授）、原英一（副査、本学特任教授）、Dorsey Kleitz（副査、本学教授）、深澤俊（副査（学外審査委員）、中央大学名誉教授）の4名である。審査委員会では、上述の通り、論文審査合格の判断を下したので、次の通り、最終試験を実施した。

まず外国語（フランス語）の試験は、博士後期課程の「最終試験の外国語の試験方法」に則り、7月3日（火）の17時より1時間、口頭形式でおこなわれた。約250語の仏文（学術論文）を和訳するという内容で、これに対して論文筆者は、十分なフランス語

能力を示すことができた。続いて7月5日(木)、博士論文に関する内容およびこれに関する専攻分野の科目全般にわたる口述試験を実施した。16時30分より18時までは公開の発表会形式を取り、その後さらに1時間にわたって、審査委員4名と論文筆者による集中的な試問が行われた。公開発表会には、審査委員4名のほか、本学専任教員2名や本学大学院学生など、10名を越す出席者があった。論文筆者による論文要旨の説明を受けて英語による質疑応答が活発におこなわれたが、論文筆者は一つ一つの質問に丁寧に答えることができた。その後におこなわれた審査委員4名による集中的な試問では、人間文化科学専攻全般の学びについての内容とともに、上述のような、特に本論文が有する問題や課題についての質疑応答がおこなわれたが、論文筆者はここでも、問題点に関する認識やその解決へ向けた今後の研究調査の見通しを適切に説明し、また、特に20世紀以降のモダニズムの動向など、イギリス文学全般にわたる広い識見と学力を示すことができた。

以上の結果を踏まえ、博士後期課程における「ディプロマ・ポリシー」ならびに「博士論文審査及び最終試験における評価基準」を考量して、審査委員会では、論文筆者の長田舞の論文審査及び最終試験の成績を合格とし、博士学位授与にふさわしいと判断した。